

C. J. ブリス・N. H. スターン

『パランプル：インドの農村経済』

C. J. Bliss and N. H. Stern, *Palanpur: The Economy of an Indian Village*, Oxford, Clarendon Press, 1982, xi+340 pp.

1.

本書は、北インド、Uttar Pradesh 州 Moradabad 地区に位置する農村 Palanpur における著者達の調査に基づいた実証研究をまとめたものである。

開発途上国における農村経済は、驚くほど多様であり、経済理論を適用して分析できないケースが多々存在する。このような状況で、集計的データを用いた経済分析から一般的含意を引き出すのは危険であり、事例研究の蓄積が望まれるゆえんでもある。にもかかわらず、アジアにおいては、本書のような経済学者による徹底した農村調査研究は極めて少ないのが現状である。

このような途上国農業経済研究の実情を背景にして、農業に関連した経済発展の理論を、インド農村における事例に照らして検討し、理論的發展の基礎を提供しようというのが、本書のねらいである。

このねらいは、C. J. Bliss, N. H. Stern といった第一線の経済学者の手によって、農業経済学のカレントトピックスに関連したいくつかの興味深い事実の指摘という形で成就されている。以下では、本書の内容および主な貢献について概説した後、若干の疑問点と希望的意見を述べることにしたい。

2.

Palanpur は、小麦を主要作物とし、高収量品種の導入もかなり進展した純農村である。この村はまた、インド農村の中では比較的カーストの影響が希薄で、土地所有・所得に関する不平等度も顕著ではないが、周辺の農村と比べて特殊な歴史的地理的環境にあるというわけでもない。

著者達は、農業経済学の諸論点(日本資本主義論争にも似た、インド農村における地主・小作関係の特質に関する論争、土地生産性と農家規模の関係、不確実性下の最適生産行動、効率賃金仮説(Efficiency Wage Hypothesis)、緑の革命の成果)に調査結果を対応させつつ、この村の農村経済を素描していく。

そこでの主な観察結果と結論は、以下のように要約で

きよう。

1) Palanpur の市場は、競争的あるいは寡占的といった経済学的概念では律しきれないものの、土地・役畜の用役を除けば各経済主体は概ね価格所与として行動している。したがって、A. Bhaduri の主張するような半封建的な地主・小作関係を軸にした搾取的取引は一般的でない。また、J. E. Stiglitz の提出した効率賃金仮説も、需要に対応して実質賃金が大きく変動するこの村の場合には、当てはまらない(第4章)。

2) 役牛の用役市場が存在しないため、役牛を所有しない土地所有者が役牛を所有する小作農に農地を小作させる傾向がある。著者達は、これを、様々な取引費用のために役牛や家族労働といった固定的要素の短期的移動が非常に困難な状況下での、一種のストック調整と解釈する。

ただし、この村の市場は、P. K. Barahan, A. Rudra が主張するような要素市場の連鎖的状態とも、Bhaduri が指摘するような地主・小作間の半封建的身分秩序に基づいた交換制度とも異なる。労働については先述の通りであるし、信用の供与についても、費用分担を約束した地主が収穫時にその分担分を小作料の中から支払うという形で、小作農から地主に対してなされている(第4,5章)。

3) Palanpur では、耕地面積のおよそ20%の農地で分益小作が行われているが、これらの小作地と自作地との土地生産性を比較すると、統計学的に有意な差異が認められないことが検証された。

分益小作という形態がなぜ選択され、他の土地経営形態と比較して生産性に差異が認められないのか、という問題については、多くの仮説が提出されている。本書では、暫定的な結論として、Cheung 理論が適用できるとする。これは、Palanpur においては、地主による小作農の監視が充分に行われ、かつ分益小作契約に盛り込まれた費用分担(肥料と灌漑)の取り決めが履行されており、土地生産性や取引費用の面で分益小作が不利でないこと、および、次に述べるように、この村の農業生産が不安定で貧しい農民達は危険の分散を選好するであろうと推測されること、等の理由による(第5章、第8章)。

4) 小麦の生産関数を計測し、肥料の限界生産力を計算すると、肥料価格の2~3倍にも達する値が算出された。これは、Palanpur における農業生産の不安定性と農民の貧しさを考慮した場合、期待効用極大化仮説によって解釈可能な現象である。マーケティング費用、収穫後の輸送費用、債務利子費用等は、決定的な説明要因

ではない(第8章)。

5) 土地生産性と農家経営規模の関係については、「小規模農家ほど土地生産性が高い」という観察事実が支配的である(A. K. Sen 1975, R. A. Berry and W. Cline 1979 等参照)。しかし、Palanpurにおいては、このような傾向は認められず、肥料の集約度はむしろ大規模層の方が高い。この点は、期待効用極大化仮説の枠組みで、絶対的危険回避度が所得・富について減少的なケースの農民行動と整合的である(第6章、第8章)。

6) 高収量品種は、一般に、資金面で有利な大農ほど容易に導入でき、その恩恵を被りやすい、と考えられる傾向がある。Palanpurの場合には、とくに小麦について、各農家が所有する富の水準と要素投入量(肥料、種粒)との間には負の関係が認められ、緑の革命が大農に有利に作用したという事実は確認できない(第8章)。

3.

インド農村における市場構造の有様や農業問題を、既存の経済理論で分析していこうとするのでなく、経済理論の妥当性を検証するという視座からの分析は、現時点では誠に時宜を得た試みであるといえよう。また、途上国農村の実態調査において遭遇する様々な障害を克服し、野心的な試みをこのような形で整理された著者達の努力に対しては、評者として敬意を表す次第である。しかしながら、最も力を注いだと思われる小作と不確実性についての議論の中に、疑問を感じざるを得ない箇所が見出せるので、この点にふれておきたい。

第1に、分益制に関連して、暫定的ではあるが、その制度的形態を規定する主な要因を危険分散機能に帰し、その論拠として、監視・履行強制が首尾よく行われているという事実をあげる。しかし、彼らも認識しているように、監視は費用分担をしない投入要素については完全とはいえないし、小作農の生産活動は人によってまちまちで、地主は各小作農を同質と見なすことができない状況にある。したがって、契約市場の存在を大前提とするCheungの理論のPalanpurにおける妥当性は甚だ疑問である。

第2に、著者達は、Palanpurにおける土地用役市場は役牛の所有を一種の入場券(Entrance Ticket)とする割当て過程(Rationing Process)によって調整され、均衡に達していると考えているようである。しかし、評者の理解する限りでは、入场券を持った小作農と地主とによって構成される競争的な契約市場が存在し、その枠内で競争的小作契約が成立していると解すべきなのか、地主・小作間の個人的信頼関係を軸にした2人関係の集合

体の中で土地貸借に関する消極的合意が形成されていると見るべきなのか、については明らかでない。前者の場合には、A. Braverman and J. E. Stiglitz 1982, P. K. Mitra 1983 等において使われた依頼人—代理人モデルのコンテキストでも理解できよう。他方、後者の場合には、小作農間の異質性を認め、前期に得た評価に照らして契約を修正する機会を持つような多期間のゲーム論的枠組みが必要となる(Mitra, p. 184)。評者は、後者の見方を支持したい。実際、彼らは別の箇所で、地主はより注意深く良質の小作農を捜そうという誘因をもち、小作農はよい耕作者であるという評判を獲得保持しようとする誘因をもつ、と述べているのである。

第3に、著者達は、生産活動に関連したいくつかの観察事実を期待効用極大化仮説で説明しようとしているが、他方で、肥料について収穫逦減が認められないという事実を指摘している。生産要素の収穫逦減が働かない状況で、果たして効用極大化が達成されるのであろうか。肥料が一定の価格でいくらでも購入できる状況にある以上、この点は疑問である。

最後に、これは希望的意見であるが、地主・小作農間の交渉が具体的にどういものであるかについての叙述的な観察事実を示してほしかった。なぜなら、この点は、農村市場の構造を明らかにする上で、最も重要でありかつ最も不明瞭な要点であると考えからである。

4.

以上のような疑問点、希望について、著者達は先刻承知の上で本書を公にされたのかもしれない。しかし、評者としては、上述した論点を超克することが、新たな妥当性をもった理論の構築へ繋がるであろうという想いを込めて敢えて論評した次第である。本書の理論発展への貢献度がいかに大きいかは最近年における小作制度や農業発展についての重要文献に頻繁に引用されていることを見てもわかる。また、本書が具体的に示してくれた不確実性の重要さは、従来不確実性を考慮せずに生産関数の測定に依存してきた多くの実証研究に対して再吟味の必要性を示唆するものである。

いずれにせよ、評者のコメントは本書の意義に較べれば些細なものであろうし、本書が経済理論の発展に与える影響は著者達の労苦を充分償って余りあるほど大きいであろう。

〔福井清一〕

〔参考文献：本書未掲載分〕

[1] R. A. Berry and W. Cline, 1979, *Agrarian Structure and Productivity in Developing Countries*, Johns

Hopkins U. P.: Baltimore and London.

[2] A. Braverman and J. E. Stiglitz, 1982, "Sharecropping and the Interlinking of Agrarian Markets," *American Economic Review*, 72, pp. 695-715.

[3] P. K. Mitra, 1983, "A Theory of Interlinked Rural Transactions," *Journal of Public Economics*, 20, pp. 167-191.

